ウルトラマンゼロ～大きな勇者と小さな勇者～

ハナト・バーニングブレイブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ウルトラマンゼロ～大きな勇者と小さな勇者～

【Ｎコード】
Ｎ２４８１Ｚ

【作者名】
ハナト・バーニングブレイブ

【あらすじ】
ウルトラマンメビウスが地球を去ってから数十年後。
地球もおおむね平和になり、武力が低下していったそんな時期。
地球は三度怪獣頻出期を向かえ、危機に陥る。
そんな中地球に降り立った『ウルトラマンゼロ』！
地球人の少年、『カグラ・マキリ』と一体化し、地球を守る為に戦うが……！？

ＳＴＡＧＥ０１　『光との出会い』（前書き）

始めましての方、そうでもない方、どうも、作者のハナトです。
この度は、私の小説『ウルトラマンゼロ～大きな勇者と小さな勇者～』をお読み頂きありがとうございます。
皆様のご期待に沿えるよう精進して参りますゆえ、どうか温かく見守っていただけるとありがたく思います。

それでは、本編をどうぞ。

ＳＴＡＧＥ０１　『光との出会い』

数年前、『第二次怪獣頻出期』と呼ばれた時代。
防衛チーム、『ＧＵＹＳ』の壊滅という劇的な形で始まったこの時代は、地球に現れた『ウルトラマンメビウス』の登場、そして新生『ＧＵＹＳ』の設立を経て激化していく。
後に『エンペラ星人』を倒したメビウスは、自らの故郷へと帰っていった。

そして数年後。
地球もおおむね穏やかになり、武力も減り、平和な時代へと注入しようとしていた、そんな時代のお話……。

ここから先、あなたの心はあなたの体を離れ、この不思議な世界へと入っていきます……。

〇ウルトラマンゼロ～大きな勇者と小さな勇者～

ＳＴＡＧＥ０１　『光との出会い』

◇　◇　◇　◇　◇　◇

――地球

一つの一軒家から、目覚まし時計の音が響き渡る。
目覚まし時計の持ち主は布団の中でもぞもぞと動き、腕だけ出して目覚ましを探す。やがて手に目覚ましの感触が伝わり、そのまま上にあるボタンを押す。
途端に目覚ましは鳴り止み、静寂が寝室を支配する。
やがて目覚ましの持ち主は手を布団の中に戻し、再び夢の中に入っていく。

すると突然部屋のドアが開けられ、紺色のセーラー服に身を包んだ髪の長い少女が入ってくる。
少女は遠慮する事無く布団を引っぺがし、丸まっている少年の耳元に向かって叫ぶ。

「起っきろぉぉぉぉぉぉぉ～！」

「ひゃわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

突然耳に届いた音の波に、丸まっていた状態から勢い良く床に転

げ落ちる。
少年を見下ろす様に少女は仁王立ちし、少年に声をかける。

「おはよっ！　マキリ！」

「いてて……おはよ、コハル……あっ」

マキリと呼ばれた少年は、後頭部を抑えながらコハルと呼んだ少女を見上げる。
すると少年の視界に、思わず声を発してしまう何かが見えた。コハルがきょとんとしていると、マキリは言ってはいけない言葉を口にした。

「……白」

「〜っ！　どこを見てんのっ！」

コハルはセーラー服であった。すなわち、中学校の制服である。
故に、彼女はスカートだった。
故に、見上げていたマキリの視界にはスカートの中身が見えた。
故に、思春期の彼がその中身に見惚れてしまうのも無理は無いのだ。
故に……コハルがマキリを蹴り飛ばすのも無理は無いのだ……。
むしろ当然である。
そうして、目覚まし時計の変わりにマキリの断末魔が響き渡った。

◇　◇　◇　◇　◇

――宇宙空間

無音の宇宙空間を、高速で飛行する二つの球体。
方や逃げている様にも見える青い球体。方や追い掛けている様に見える赤い球体。
赤い球体が緑色の光線を放つが、青い球体はそれをいとも簡単に避ける。
そして青い球体は火星を通り過ぎ、青い星へ向かっていった。
太陽系第三惑星、『地球』である。

『っ！　しまった……！』

赤い球体は悪態をつき、速度を上げて青い球体を追い掛けた。

◇　◇　◇　◇　◇

――地球

パジャマから学ランに着替えたマキリは、左頬に紅葉を思わせる

赤い痕を残し、先程から機嫌を損ねているコハルの後を追っていた。

「コハル～、だからゴメンってば～……。っていうか僕もせいじゃないでしょ？」

「……色を口にした時点でマキリが悪い」

「そんな～……。コハルのパンツなんてもう何度も見てきたじゃんか～……」

「っ！　もう……バカっ！」

「あてっ！」

マキリは必死に謝罪するが、コハルはそっぽを向いて不機嫌さをアピールする。

そしてマキリが口走った言葉に、コハルは顔を真っ赤にしてマキリの右足を踏みつける。

この一言多い少年が、この物語の主人公、『カグラ・マキリ』である。

そのマキリの幼馴染である髪の長い少女、『ツバキ・コハル』。

マキリとコハルは家が隣であり、また両親同士が知り合いであった事から、幼い日から一緒に過ごしてきた。

母親と二人暮らしであるマキリは、その母親が家を留守にしている事が多く、コハルが保護者代わりをするのも珍しくは無い。

そんな彼等も十四歳の冬休みを数週間後に控え、クリスマスへの計画に思いを馳せていた。

右足を抑えながらマキリは学校にたどり着き、冷たく先を歩くコハルを追う。
マキリが靴を履き替えると、赤いジャージを着た男性が声を上げる。

「おっ……っはよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉうっ！」

その声の大きさに、一瞬学校全体が揺れる。
髪の毛も上に逆立った筋肉隆々の男性、体育教師の『オニグラ・ゴン』である。
コハルも一瞬足を止め、引き攣った笑顔で挨拶を返す。

「お、おはようございます。オニグラ先生……」

「お、おはよーございますぅ……」

「おう！　カグラにツバキ！　今日もラブラブだな！　結構結構！まさに青春だぁぁぁぁぁ！」

「「違いますからっ！」」

からかう様なオニグラの発言に、マキリとコハルは顔を真っ赤にして声を揃えて叫ぶ。
そのまま逃げる様にして二人は階段を駆け上がり、『2年3組』と札の掛かった教室に滑り込んだ。

「おんや～？　マキハルカップルのご到着だにゃ～」

「「だから違うって！」」

コハルとは対照的に髪が短く、口の端に八重歯を除かせる少女が二人にそう声をかける。
再びマキリとコハルは声を重ね、そのせいで少女はさらに笑う。

「にゅふふ～ん♪仲良しなのは良い事にゃ～」

「チナツちゃ～ん……。もう、からかわないでよぉ～……」

コハルはチナツと呼んだ少女に、顔を赤らめたまま否定する。
目の前の少女、『スザキ・チナツ』は嬉しそうに笑い、その場を後にした。するとそれと入れ替わる様にして、マキリの首を絞める様に誰かが腕を回す。

「オッス！　マキリ～、おめえま～たイチャイチャと登校か？　真冬だってのに熱いねぇ～……」

「ちょ、アキラ君！　苦しいって……っていうかイチャイチャしてないから！　むしろボコボコって表現の方が正しいから！」

オニグラと同じ様なにおいを感じる少年、『イカルガ・アキラ』。
息子と疑われるほどオニグラと性格が似ており、熱血バカと称される事もしばしば。
すると傍でその会話を聞いていたのか、長い髪をツインテールにしたツリ目の少女がそっけなく声をかける。

「カグラ君……またツバキさんに何かしたの……？」

「ご、誤解だよカザマさん！」

「ふぅ～ん……。ま、法に違反しなければ何でも良いけどね。精々熱い夜を過ごしなさい」

「そ、そりゃないよぉ～……」

訝しげにマキリを見つめる女子学級委員、『カザマ・フユカ』。
そうしてどこか冷たくマキリに止めを刺し、学級日誌を抱えて席に着いた。
チャイムが鳴り、アキラもマキリを放して席に着く。マキリとコハルも席に着くが、二人ともほぼ同じ所に座る。
偶然か必然か、二人は席も隣同士であった。冷やかされるのには慣れたが、今日の様にコハルが機嫌を損ねた日は気が重い。
空気を誤魔化そうと、マキリは後ろの席に座るメガネをかけた少年に声をかける。

「ね、ねえテツヤ君……？」

「ぶつぶつ……テレスドンとデットンは骨の構造と嘴の長さが違う……ぶつぶつ」

怪獣の描かれた分厚い図鑑を手に、何かぶつぶつ呟いている『クゼ・テツヤ』。

マキリはテツヤと会話するのを諦め、ため息をついて窓から空を見上げた。

すると一瞬空で何かが光る。

「アレは……？」

マキリが呟き、コハルが微かにマキリの方を向いた瞬間、轟音と共に学校が揺れる。

「な、何っ！？」

「またオニグラ先生が何か叫んだんかにゃ！？」

「バカヤロー！　俺の恩師がそんなバカな真似する訳ねーだろ！」

「貴方の恩師だからバカなのよ」

コハルが驚きながら叫び、チナツが独特の語尾で思いつく可能性を上げる。アキラがそれに憤慨するが、フユカが冷静にツッコミを入れる。

すると窓から外を見ていたテツヤが、青い球体から出てきた怪獣を見て呟く。

「宇宙怪獣……ベムラー」

「えっ……？」

腕の短い、刺々しい体をした怪獣、『宇宙怪獣ベムラー』が雄たけびを上げる。

そして口から青い熱線を放ち、周囲のビルを破壊し始める。

「皆……逃げろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

校庭でオニグラが叫び、生徒達は一斉に校舎から抜け出す。

コハルも急いで教室から出ようとするが、マキリは唇を噛み締めてベムラーを睨んでいた。

「マキリ！　どうしたの……？」

コハルの呼びかけにも応えず、不思議に思ったコハルはマキリに近付く。

その表情を見て、コハルはいつもと違う様子のマキリに驚きながら見つめる。

「マキリ……？」

「……なんで、壊しちゃうんだろうね……。皆が一生懸命立てて、一生懸命生きてるこの街を……なんで簡単に壊せるだろう……」

マキリは悔しそうに拳を握り締め、噛み締めた唇からは血が滲み出る。

そしてマキリは教室を飛び出し、階段を駆け上がる。

「あ、待ってよマキリ！」

行きとは反対に、コハルがマキリを追い掛ける。

マキリは屋上に飛び出し、落ちていたコンクリートの破片をベムラーに投げつける。

するとベムラーはマキリの方を向く。

「っ！　……もう……もう止めてよ！　何で街を壊すの！？　この街は……君に何かしたの！？　理由も無いのに、僕達の街を壊さないでよ！」

ベムラーのおぞましい表情に一瞬怯んだマキリだが、震える脚を誤魔化しながら上ずった声で叫ぶ。

コハルも追い付き、少し離れた所からマキリに声をかける。

「だ、ダメだよマキリ！　早く逃げないと！」

声をかけるが、コハルは一歩も動かない。いや、動けなかった。目の前の怪獣に恐怖心を抱き、足がすくんで動けなかったのだ。

そして怒りが頂点に達したのか、ベムラーはマキリに熱線を吐いた。

「っ！」

「マキリ！」

コハルが声を荒げた瞬間、マキリを包む様にして赤い球体が降ってきた。

◇　◇　◇　◇　◇

――眩い空間

マキリは硬く瞑っていた目を開き、目の前に広がる光景に目を見開く。

「うえぇぇぇ！？　どどど、どうなってるの！？」

『あぶねー所だったな』

驚くマキリに答える様に、上半身が青、下半身が赤を基調にした二本角の巨人が立っていた。

「うわわわわっ！？　君誰！？」

『俺は光の国のウルトラ戦士、ウルトラマンゼロだ！』

「う、嘘だ！　ウルトラマンがそんな怖い顔な訳無い！」

『んだとクソガキ！』

マキリはひたすら驚き、巨人は自慢する様に自分を指差して『ウルトラマンゼロ』と名乗る。

だがマキリは、思い描いていたウルトラマン像を壊され、目の前の巨人がウルトラマンである事を否定する。ゼロはそれに憤慨するが、慌てて咳払いを一つする。

『コホン……。とにかく、俺はお前のそのベムラーにも臆さない勇気に感動した。だから俺は、お前の体を貸して貰いたい。この状態だと、長くは地球に留まれねえからな……どうだ？』

「良く分からないけど……とにかく、あの怪獣をどうにかできるんだよね？」

『おう。俺にかかりゃ、あの程度のザコ一瞬だぜ！』

「……分かった。僕の体を貸すよ」

『サンキュー！』

ゼロはそう言うが早いか、体を光の粒子にしてマキリの中に入っていく。

そしてマキリの左手首に銀色のブレスレットが装着され、そこからゼロの体を同じ様な色をしたメガネが出現する。

マキリの両眼にそれが装着され、光の空間が消えていった。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

――地球

赤い光が止み、ベムラーと学校の間に光の巨人、『ウルトラマンゼロ』が立っていた。

『デアッ！』

ゼロはそう叫ぶと同時にベムラーに突進し、その懐に拳を叩き込

む。
だがその感触に、ゼロは違和感を感じる。
（なんだ？　体に力が入らねえ……）
本来のゼロなら、ベムラーに苦戦する様な力ではない。そして別の宇宙な訳でもなく、本来のゼロが存在していた宇宙である。であるにも関わらず、ゼロは本来の力を発揮できなかった。
驚いて動きが止まったゼロに、ベムラーの熱線が直撃する。
『ぐあっ！』
ゼロはそのまま吹き飛び、後方のビルを破壊する。
頭を振りながらゆっくりと立ち上がり、ゼロは焦りを感じる。
胸の青い光球が、橙色に点滅を始めた。
（やべーな……。エネルギーの消費も早ぇ……）
ゼロは上唇を親指で弾き、空高く飛び上がる。そして右脚を発火させ、『ゼロキック』をベムラーに直撃させる。
『デァリャッ！』

　そして倒れ込んだベムラーに、間髪居れず左腕を水平に伸ばし、腕をＬ字に組んで銀色の光線を放つ。

『デェエリャァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！』

『ワイドゼロショット』がベムラーに炸裂し、断末魔を上げてベムラーは四散した。

　ゼロは肩で荒い呼吸をしながら、光に包まれてマキリの姿に戻る。

　マキリが屋上に立つと、どっと疲れが襲ってきた。前のめりに倒れそうになるマキリを、慌ててコハルが支える。

「マキリ！　大丈夫……？」

「コハル……大丈……夫……」

　心配そうな顔をするコハルを落ち着かせる様に、マキリは笑顔を作る。だがすぐに意識を手放し、コハルにもたれかかる様にして倒れた。

　マキリと一体化したゼロはそんな地球に違和感を感じていた……。

To The Next Stage

ＳＴＡＧＥ０１　『光との出会い』（後書き）

いかがでしたでしょうか？
では次回、【ゼロの始まり】
でお会いいたしましょう。

STAGE02　『ゼロの始まり』

――保健室

綺麗に整えられたベッドで、マキリは目を覚ました。

「ここは……？」

「マキリ！」

意識を取り戻したマキリに、コハルが嬉しそうに抱き付く。が、慌てて顔を真っ赤にして離れる。

コハルはしばらく赤くなったままあたふたと手を振った後、ようやく落ち着きを取り戻して近くの椅子に座る。

「で……どう？　調子は……」

「いや、特に何とも……」

『ま、戦闘中は俺の意思俺の体だからな』

マキリとコハルが不思議そうに会話をしていると、突然マキリの左手首に装着されたブレスレットから声がする。

そのブレスレットが輝き、ちいさなぬいぐるみサイズの『ウルト

ラマンゼロ』が出現する。

「「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！？」」

『っせ！　説明はこっちの方が楽なんだよ。三分しか持たねえから静かにしてろよ』

マキリとコハルが抱き合いながら絶叫すると、ミニマムサイズのゼロ、通称『ミニゼロ』は耳を抑えて注意する。

「あ、ちょっと可愛いかも……」

『か、可愛いって言うな！』

コハルが小動物を見る様な目でゼロを見ると、ゼロは照れた様に大きな声を上げる。マキリがむすっとしていると、コハルはベッドの横に座ってゼロを抱きかかえる。ジタバタと短い手足を動かす様子が、さらにコハルの心をくすぐり、さらにマキリの表情をむすっとさせた。

「で？　いいから早く説明してよ」

『は、放せ！　……あぁもう！　この状態で説明するっきゃねえか……』

ゼロは諦めた様にため息をつき、事の次第について語り始めた。

○ウルトラマンゼロ～大きな勇者と小さな勇者～
ＳＴＡＧＥ０２　『ゼロの始まり』

◇　◇　◇　◇　◇

――ゼロ視点

さっきも言ったが、俺は光の国のウルトラ戦士、『ウルトラマンゼロ』だ！　かの有名な『ウルトラセブン』の息子だぞ！
んでもって、俺はあの棘野朗、『宇宙怪獣ベムラー』を追って地球に着た。んで地球じゃ長時間活動できないのは聞いてたから、念の為人間の体を借りようとしてた。

そしたら丁度勇気ある人間が居たからな。お前の体を借り様と思って同化した。
んまぁかなり失礼な事言われたが、体を貸してくれた事にゃあ感謝してるぜ？
戦闘中は俺の体を、俺の意思で使っている。お前の意識はあるけど、視覚と聴覚以外は全て封じられる。当然痛覚もな。多分今回のは、急に今まで見えなかったものや聞こえなかった事が聞こえてきたから、お前の脳みそが耐えられなかったんじゃねえの？
そんで戦ったのは良いが、どういう事か俺の力が半分以下しかでねえ。
本当はベムラーをぶっ潰したらさっさと帰ろうと思ってたけど、さすがに様子がおかしい。
だから俺は、しばらく地球に残ろうと考えている。

――ゼロ視点・ｏｕｔ

『で、しばらくの間お前の体を借りていたいんだけど……どうだ？』
「僕は良いけど……その力が出ないって言うのは大丈夫なの？」
「それなんだけどさ……」
ミニゼロはマキリに許可をもらい、しばらくマキリと一体化して戦う事になった。そしてマキリがゼロの調子について聞いたとき、コハルが口を挟んだ。

「マキリってさ、昔から体が弱くて、学校も休みがちだったんだ……もしかしてそれのせいじゃない？」

「僕もそれは思った……。後、ウルトラマンって寒さに弱いんだよね？」

『ああ。俺の家系は特にな』

「今日本はね、冬っていう一年で一番寒い時期に突入してるんだ。それもあるんじゃない？」

コハルによると、マキリは病弱な為体力が他の生徒より劣っているらしい。

そのマキリが言うには、日本の気象が影響しているとか。しばらく思案していたミニゼロの体が輝き、マキリの左手首にあるブレスレットに戻る。

『制限時間か……』

「ねえゼロ、このブレスレットって何なの？」

『ん？　あぁ、『ウルティメイトブレスレット』だ。俺かお前が戦いたいって思ったとき、そこからウルトラゼロアイが出現する。それを両目に当てれば、あっという間にゼロに変身だ！』

マキリがブレスレットについて聞くと、ゼロは分かりやすく説明

する。
そうしてマキリがベッドから降りると、突然大地が揺れる。
「今のって……」
『どうやらまた何か来たらしいな……行くぞマキリ！』
「うん。コハルは逃げて！」
マキリはコハルにそう言い残し、校庭に向かって走り出した。
◇　◇　◇　◇　◇　◇
――校庭
『フォッフォッフォッフォッフォ～！』
校庭に出るとセミの様な顔をした、両手に巨大な鋏を持った宇宙人が立っていた。
『宇宙忍者バルタン星人』である。
『バルタンか……。うっし、さっさと決めるぞマキリ！』

「ちょ、ちょっと待ってよ！　こんな所で戦ったら被害が大きいよ！」

『はぁ！？　ここであいつを倒せねえ方がもっと被害が出るだろ！』

「けど……」

『あぁもうじれってえ！』

ゼロが気合を入れるが、マキリは街への被害を考慮して変身を拒む。

なおもゼロは早期決着を望むが、マキリはマキリでそれを拒み続ける。

短気なゼロがそれを我慢できるわけ無く、マキリの左腕のコントロールを奪い、前に突き出す。するとウルトラゼロアイが、ブレスレットから回転しながら出現する。

「……ダメだって！」

だがマキリは強引に右手を動かし、ゼロアイを叩き落とす。

『てめえ！』

ゼロがマキリに怒鳴ると、マキリの近くにバルタン星人の『白色破壊光弾』が直撃し、爆発を起こす。

「うあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

衝撃でマキリは吹き飛ばされ、ウルトラゼロアイの傍から離れる。
マキリは校庭を転がり、痛みに呻く。

『ちっ！』

ゼロは一度舌打ちし、左腕を伸ばす。するとウルトラゼロアイが勝手に浮遊し、マキリの手元まで来る。
『ウルトラ念力』である。そのままゼロアイはマキリに着眼される。

「ちょ、ちょっと待って！」

『デュワッ！』

マキリが嫌がるのを無視し、ゼロは勝手に自身の姿に戻る。
ウルトラマンゼロはバルタン星人に対峙し、勢い良く突進する。
一歩踏み出すごとに大地が揺れ、木々や家が揺れ動く。

『デァリャッ！』

ゼロは先手必勝と言わんばかりに右足を発火させ、『ゼロキック』を放つ。
だが突然バルタン星人が消え、ゼロキックはバルタン星人の背後にあったビルを破壊する。

『ちっ！　どこ消えやがったあの野朗！』

ゼロは舌打ちしながら周囲を見回す。そんな中、内心焦りを感じていた。

（早く片付けねえと……時間がねえ！）

初めて経験する明確な制限時間に、ゼロは焦らずに入られなかった。すぐにでも『ワイドゼロショット』を打てる様に左腕を伸ばして構え、静かに周囲を見回す。

『フォッ！』

右斜め前にバルタン星人の姿を捉え、ゼロは腕をL字に組んで銀色の光線を発射する。

『そこだ！』

だが再びバルタン星人がテレポートし、ワイドゼロショットはマンションを大破させる。
ゼロは数歩前に出て、周囲を見渡す。

『ちくしょ……汚えぞ！　隠れてねえで出て来い！』

するとゼロの背後にバルタン星人が出現し、ゼロは頭に生えた二本の角、『ゼロスラッガー』を握る。

『今度こそ！』

『だめだよゼロ！』

それをカラータイマーの横に装着しようとした瞬間、マキリの意志が割り込み邪魔をする。
ゼロが腕を動かそうともがいていると、バルタン星人は宇宙に飛び立っていってしまった。
ゼロはカラータイマーを輝かせ、マキリと自分を思念空間へと誘った。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

――思念空間

ゼロはマキリとほぼ同じ大きさになり、その胸倉を掴む。

『てめえ自分が何したか分かってんのか！』

「それはこっちのセリフだよ！　あれ見てよ！」

マキリはゼロの手を振り払い、横に移る街の光景を指差す。
賑わっていた町並みは消え失せ、壊滅したビルやタワーなどが瓦礫と化して鎮座している。

「どれがベムラーがやった事で、どれが君のやった事なんだよ！
どこかに違いがある？　どこも無いよね！？」

『街なんかより人間の方が優先だろ！』

「街にだって人は住んでるんだよ！　住んでなくても、家が壊れればそこに住んでた人は悲しむ！　街を守るのも、人を守るのも同じ事なんだよ！」

マキリの言葉に、ゼロは押し黙る。
ベムラーとゼロの不発光線によって破壊された町並み。マキリの言う通り、ベムラーがやったものとゼロがやったものに差は無かっ

た。
マキリは一つため息をつき、冷たくゼロを睨む。
「とにかく、もう君の力は借りない。僕一人で何とかする」
『はっ！　勝手にしろ』
ゼロは不貞腐れた様にマキリに背を向け、思念空間を解除した。
◇　◇　◇　◇　◇
――校舎内
翌日、学校はマキリとゼロの活躍によって無傷な為休校にはならなかった。
マキリはすぐさま、後ろの席に座る『クゼ・テツヤ』に話しかける。
「テツヤ君！　昨日の宇宙人の事、詳しく知ってる！？」
「うん……。宇宙忍者バルタン星人。ドキュメントＳＳＰ（スリーエスピー）とＭＡＴ、ＵＧＭに記録のある宇宙人。分身能力と高い知性、他にもテレポートに高速移動、白色破壊光弾とか赤色凍結光線とかの多彩な技

を持つ宇宙人……」

テツヤの詳しい説明に、マキリは奥歯を噛み締めて顔を伏せる。
再び顔を上げ、もう一つ質問をする。

「何か、何か弱点は無いの！？」

「ある……。火星の物質、スペシウムが弱点……だったはず」

マキリはバルタンの弱点をメモし、ふとテツヤの方を見る。

「ところで、その赤色凍結光線ってどんなの？」

「……ああなる」

マキリの質問に、テツヤはマキリの背後を指差す。その先には、凍り付いた様に動かなくなったクラスメイトの姿があった。
マキリが呼びかけても触っても、何の反応もない。

「ど、どうなってるの……？　ねえ、テツヤく……っ！」

不思議に思ったマキリが振り向くと、テツヤも同じ様に動かなくなっていた。

それを見たマキリは、ふと一人の少女が頭をよぎる。

「コハル！」

マキリはいても立ってもいられず、教室を飛び出した。

・　・　・　・

――下駄箱

「はぁ……。マキリってば、今日は私を置いて先に行っちゃってさ……」

コハルは寂しそうに呟き、靴を履き替える。
すると背後に何かの気配を感じ、勢い良く振り向く。

「誰っ！？」

が、その視線の先には誰も居なかった。強いて言えば、風に揺ら

れた木の葉が動く程度だった。

「気のせいかな……」

そう呟いてコハルが正面を向くと、目と鼻の先にバルタン星人が立っていた。

思わず引き下がるコハルだが、そのコハルにバルタン星人が両手の鋏を突きつける。

（マキリ……）

心の中でそう呟き、硬く目を瞑った。

・・・・

「コハル！」

マキリが下駄箱に来ると、そこには硬く目を閉じて硬直したコハルの姿があった。

マキリは震える脚で近付き、冷たく冷え切った頬を撫でる。

「……ごめんね、コハル……。怖かったよね……」

コハルを抱いて涙を零しながらそう囁くマキリ。そして涙を目に蓄えたまま、マキリは目付きを変えた。

◇　◇　◇　◇　◇

――屋上

その日の午後、マキリは何かのスイッチを持って屋上に立っていた。

そして目を瞑り、そのスイッチを押す。すると校舎内のあちこちが青白く輝き、苦しみながら屋上にバルタン星人が姿を現す。

「やっぱり。君、スペシウムが苦手なんだってね？　だから学校のあちこちに、スペシウムダイオードを設置させてもらったよ」

マキリはそう言いながら、豆電球の先についた青白い鉱石を見せる。

スペシウムはプラスの電気を帯びており、マイナスの電気を流す事で強力な光を放つ。光線とまではいかなくても、その光を浴びる

だけでもバルタン星人には毒だった。

「今の弱った君なら、僕でも倒せる！」

マキリはそう叫び、スペシウム鉱石を投げつけた。刹那、バルタン星人は巨大化し、スペシウム鉱石を叩き落とす。

「そんな……」

そしてバルタン星人は腕を振るい、マキリは屋上から落下する。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

するると突然落下が停止し、周囲のものや音も止まる。
マキリが驚いていると、思念体のゼロが声をかける。

『もう良いだろ。さっさと俺になれ！』

「嫌だ！」

『お前まだそんな……』

いい加減自分に頼らせようとするゼロだが、マキリが頑固にそれを拒む。ゼロは呆れた様なイラついたような様子で後頭部を掻く。

『良いか？　今のお前じゃあいつは倒せねえ。確実に死ぬぞ？』

「それでも……自分にできる事をできなかったら、絶対に後悔する……。そんなの、死んでも死にきれない！」

『ちっ……。あぁもう分かった！　良いか良く聞け？　お前の姿のときは、お前に全部任せる。変身するタイミングも、戦う場所も、全部お前が決めろ！　ただし、変身したら、俺は好きな様に暴れさせてもらうぜ？　どうだ！』

「……分かった。良いよ！」

ゼロの契約に、マキリも賛成する。
するとゼロの思念体は消え、代わりにマキリの右手にはウルトラゼロアイが握られる。そして時が動き出し、マキリは再び落下する。

「行くよ……ゼロ！」

『ああ、マキリ！』

マキリはゼロに呼びかけ、ゼロはそれに力強く返す。
そしてマキリは、短く叫びながらウルトラゼロアイを装着する。

「デュワッ！」

マキリの体が光に包まれ、学校を庇う様にしてウルトラマンゼロが出現する。
ゼロは宇宙拳法の構えを取り、バルタン星人に殴りかかる。

『デアッ！』

だがバルタン星人は再びテレポートし、ゼロの視界から消える。
刹那、ゼロはゼロスラッガー二本を無造作に投げる。それらはゼロの正面に飛んでいってしまう。すると、ゼロの背後からバルタン星人が出現する。

『後ろ！』

『もらったぁ！』

マキリの掛け声と共に、ゼロスラッガーが軌道を変えてバルタン星人の両腕を切断する。
バルタン星人が痛みに悶えると、マキリが得意げに説明する。

『人間の目は周囲１８０度を見渡せる。だったら、自分の背後に全神経を注いでれば良いんだ！』

『残念だったな、セミ野朗！』

ゼロはバルタン星人を鼻で笑い飛ばし、スラッガーを胸部に装着する。

そこにエネルギーが集まり、ゼロは胸の前で腕を交差させる。

『食ら……っと』

バルタン星人がタイミングに合わせて胸に仕込んだ壁、『スペルゲンコート』を展開させるが、ゼロは途中で光線を打つのをやめる。

『ここで撃つのはまずい、か』

バルタンの背後には学校がある。少しでも外れれば、学校にも被害が及ぶ。

ゼロはスラッガーを外し、それぞれのスラッガーを付き合わせる。するとゼロスラッガーが巨大な弓状になり、ゼロの右手に握られる。

『ゼロツインソード』である。

『行くぜ？　マキリ！』

『うん、ゼロ！』

ゼロはマキリに声をかけ、マキリはそれに力強く応える。
そしてゼロは高速でバルタン星人に接近し、ツインソードを横一文字に振るう。
『デエエエエリャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！』
バルタン星人を切断し、断末魔を上げて星人は爆発した。
ゼロは光に包まれ、マキリの姿に戻った。

◇◇◇◇◇

――カグラ家

ミニゼロがテレビを見ていると、マキリが急にチャンネルを変える。
『あっ、マキリてめえ！　勝手にチャンネル変えんなよ！　今俺が〇〇見てただろ！』
「えぇ～？　〇〇よりグリッドマンの方が面白いよ～」
『はぁ！？　何がグリッドマンだよ！　声がミラーナイトに似てん

だよ！』

「意味わかんないし！」

リモコンを取り合いながら喧嘩するミニゼロとマキリ。
その光景を遠目に見ていたコハルは、盛大なため息をつく。

「まぁでも、ちょっと嬉しいかな……」

どうやら動けなかったときの事も覚えているらしく、少し頬を赤らめるコハル。
すると二人の手を離れたリモコンが、コハルの額に直撃する。

「『あっ……』」

「……ふぅたぁりぃとぉもぉぉぉぉぉ！」

「『ごっ、ごめんなさぁぁぁぁぁぁぁぁぁい！！』」

こうして、カグラ家はさらに賑やかになったとさ。

To The Next Stage

STAGE02　『ゼロの始まり』（後書き）

いかがでしたでしょうか？
よろしければ、感想等頂けると嬉しいです。

では次回、【秘密の湖】でお会いしましょう。
それでは！

STAGE03　『秘密の湖』

――中学校・校庭

「怪獣騒ぎで授業が潰れたり、皆も運動ができずストレスが溜まっていると思う……がぁ！　その鬱憤を晴らしてやるぞ！　さあ、この校庭を全力で二十周だ！」

「オッス！」

体育の時間。真っ赤なジャージに身を包んだオニグラが、非常に耳を塞ぎたくなる宣告をした。

マキリやコハルも含め複数の生徒がブーイングするが、唯一アキラのみ元気良く返事する。それこそまさに、彼が周囲から『熱血バカ』と称される所以だろう。

渋々と言った様子で各々準備体操をはじめ、オニグラのホイッスルと同時に走り出した。

・・・・・

「ぜぇ……はぁ……ひぃ……ふぅ……」

『おいマキリ……大丈夫か？　何か死にそうな顔してんぞ……？』

「大丈夫に……ひぃ……見えたら……ぜはぁ……褒めて……げほっ……あげるよ……ごふっ」

『分かった。分かったからもう喋るな』

死神の様な顔をしてえっちらおっちら足を動かすマキリに、ゼロは心配して声をかける。だがマキリは返事するのも精一杯な様で、声が掠れ呼吸も乱れている。まだ四周目だというのに。ゼロはしばらく思案した末、マキリの脳内に直接語りかける。

《おいマキリ、これで聞こえるか？》

「ふぇっ！？　ゼ、ゼロっ……げほっ、げほっ、ごふっ……」

《いや喋るなっつうの！　いいからとりあえず、頭ん中で何か言ってみ？》

《えっと……こう？》

《ああ、上手いぞ！》

突然脳内に響いてきたゼロの声に、マキリは思わず素っ頓狂な声を上げる。がしかし、慣れない運動を寒い上に乾燥した空気の中したせいで、彼の喉は純情じゃないダメージを負っていた。

そこでゼロの言葉通り脳内で彼に話しかけた。

重たい足を引き摺りながら、マキリはゼロと会話を進める。

《で、ちょっと聞きてえんだけど……、あのスペシウム鉱石ってどっから持って来たんだ？》

《あぁ、理科室に置いてあったんだ。たまに実験で使うんだよ？あのスペシウム》

《はぁ～……、地球人も進化してんだな》

以前バルタン星人が襲来した際、マキリはどこから共無くスペシウム鉱石の付いた豆電球を取り出した。喧嘩中であまりマキリの方に意識を集中していなかったゼロは、その事が以前から気になっていた。

そしてマキリの説明に、今まで自分が抱いていた地球人像が覆された様な気がした。

弱く小さく、自分達が守っていかなければならないが、それでも掛け替えの無い種族だと、父親を含めた『ウルトラ兄弟』からは聞かされていた。

だがしかし、実際彼が出会った地球人は違っていた。確かに自分達に比べれば小さいが、それでもどこか強く、自分達で平和を守っていける。そんな感じがした。

「マキリ～、大丈夫？」

「はぁ……ひぃ……こ、コハル……。だ、だいじょぶだよぉ……げぇっほ、げっほ！」

「には見えないけど……」

「にゃ～、マキリ君も大変だにゃ～……」

マキリを心配して近付いてきたコハルとチナツ。マキリの返答にも、二人の不安は募るばかり。マキリ的には、クラス内で一位、二位を争う人気を誇っているコハルとチナツに心配されているせいで、他の男子からの視線により別の不安が募っていく。

「諦めるなマキリぃ！　疲れは青春のアクセサリー！　燃える闘志でファイヤー！」

「熱血バカは黙ってなさい。カグラさん、無理して皆に心配をかけるぐらいならさっさと保健室に行ったらどうかしら？」

（グレンファイヤーと、ちょっとキツイミラーナイトみてえだな……）

突然マキリの肩をバシバシと叩くアキラ。それと同時にやって来たフユカが、彼を一蹴する。そしてマキリに言った言葉を聞いて、ゼロは別宇宙にいる仲間達の姿が重なる。

だが、そんなフユカが言い放った冷徹な言葉に、コハルが憤慨する。

「ちょ、ちょっとフユカちゃん！　何もそんな言い方しなくても……」

「なに？　私は事実を言ったまでだけど？」

「ふ、二人とも落ち着いて～！」

走りながらフユカを睨むコハルに、フユカも負けじと目付きを険しくする。だが、彼女の身長が１５０センチをきっているのもあり、大して怖さは無い。むしろ可愛らしさが勝っているというのがコハルの本音だろう。

そんな胸の内をしらないチナツは、必死で走りながら二人を止める。

すると三人の背後で、テツヤの声がした。

「三人とも……本人は放っておいていいの？」

「「「本人？」」」

テツヤの言葉に、コハルとフユカ、チナツが振り返る。

その先には、うつ伏せに倒れたマキリを木の枝で突くテツヤの姿があった。

「きゃぁぁぁ！　マキリしっかりして！」

「か、カグラさん！　……べ、別にあなたを心配してる訳じゃ無いのよ！　勘違いしないでよね！」

「カザマさん！　そんなナイスなツンデレをかましてる場合じゃないにゃ！」

『マキリしっかりしろぉぉぉ！！』

慌ててコハルが駆け寄り、マキリを抱き起こす。それに釣られてフユカもマキリに近付くが、ふと我に帰った様に腕を組んでそっぽを向いた。チナツはフユカにツッコミを入れつつ、自身もマキリに近付く。

ゼロも必死にマキリに呼びかけ、その横でテツヤはマキリを突き続ける。

口から何か出しちゃいけないものを吐くマキリは、目を回しながら痙攣していた。

その光景を、黒いワンピースを着た少女が見つめていた……。

○ウルトラマンゼロ～大きな勇者と小さな勇者～

ＳＴＡＧＥ０３　『秘密の湖』

◇　◇　◇　◇　◇　◇

――保健室

大量に汗をかきながらも気持ち良さそうに眠るマキリの横で、ミニゼロが心配そうに見つめる。

『マキリがこの状態じゃぁ、当分変身は無理だな……』

ミニゼロがそう呟いたとき、保健室の奥からだれかの足音が聞こえてきた。

ミニゼロは慌ててベッドの下に潜り、様子を伺う。

そこにやってきたのは、先程の黒いワンピースを着た少女だった。その少女はいとも簡単にマキリを抱え、すぐさま保健室から抜け出した。

『なっ！』

ミニゼロが慌てて追い掛けるが、制限時間が来てしまい、ウルトラゼロアイとなって空しく床に転がる。

・

・・・

「マキリ～、具合どう～？」

そう言いながらコハルがカーテンを開けると、そこには空になったベッドしかなかった。

「え？　マキリ！？」

『コハル！　こっちだこっち！』

驚いたコハルが布団を無造作に動かしていると、足元から声がした。

コハルは視線を下げ、床に転がったウルトラゼロアイを発見する。

「ゼロ！」

コハルはそれを拾い上げ、自身の目の高さまで持ち上げる。

「ゼロ、マキリは！？」

『それが……マキリが宇宙人にさらわれた……』

「うそ……」

コハルがゼロアイを何度も揺すって尋ねると、ゼロは悔しそうにマキリが誘拐された事をコハルに伝える。コハルは驚きに目を見開き、その場で硬直してしまう。

『すまねえ……。俺が不甲斐無いばかりに……』

ゼロは初めて経験するえも言われぬ悔しさに、ただただ後悔するしかできなかった。

ミニゼロの姿で居ればウルトラゼロアイを盗まれるというリスクは減るが、反面同化した人間とも離れてしまうため、マキリの方に危険が及ぶ可能性をゼロは見落としていた。見事にそこの穴をつかれ、ゼロは怒りと後悔の念でいっぱいだった。

「ゼロ……その宇宙人について、何か分かる？」

反面、意外なほどコハルは冷静だった。確かにその表情からは怒りが滲み出ているが、決してあわててはいなかった。

『あ、ああ。多分あいつはピット星人だ。以前にも地球に来た事があって、そのとき親父からウルトラアイを盗み出したって聞いたな……』

「そのとき、ピット星人はどうやってウルトラセブンと戦ったの？」

『確か……湖に円盤と怪獣（エレキング）を隠して……』

自分とは対極に冷静なコハルに、ゼロは若干驚きながら説明する。

彼の予想では犯人は『変身怪人ピット星人』であった。数十年前にも地球を訪れ、ウルトラセブンことモロボシ・ダンから変身アイテム、ウルトラアイを盗み出し、さらに湖に隠した怪獣、『宇宙怪獣エレキング』を操ってセブンや『カプセル怪獣ミクラス』と交戦した。

コハルはしばらく顎に手をあて、何かを考える。そして思い出したのか、はっと目を見開く。

「それだ！　確か一昨日（おととい）、湖で何か奇妙な音がするって……チラッとニュースでやってた気がする」

『ビンゴだな……。悪ぃコハル、俺をそこまで連れてってくれるか？　早くしねえとマキリが危ねえ……』

「当然そのつもり！」

コハルの言葉に、ゼロも確信を持つ。

そしてコハルはウルトラゼロアイを握り締め、保健室を抜けて走り出した。

その途中、廊下で教員とすれ違う。

「ん？　ツバキ、どこに行くんだ？」

「あぁ、矢的先生！　わ、私早退します！」

コハルは早口にそう言い、すぐに靴を履いて学校から飛び出した。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

――どこかの湖畔・円盤内

両腕両足をYの字に縛られたマキリは、むせ返る様な甘い匂いに目を覚ました。

「ここは……って何か縛られてる！？」

「あら、ようやくお目覚め？」

起きて早々自身の状態にツッコミを入れるマキリ。

そんなマキリに、例の黒いワンピースを着た少女がくすくすと笑いながら声をかける。

「君は……？」

「分からない？　私達があなたをここへ運んできたのよ？　ウルトラマンゼロ！」

「へぇ～。重いから大変だったでしょ？」

「へっ？　ま、まぁそうね……。でもあなた、見かけの割りに軽いわね」

「そうかな？　まぁ少食だからね～」

マキリが不思議そうに首を傾げると、少女は高笑いでもするかのようにマキリを見据え、高らかに宣言する。

だかマキリは後半部分よりも、その体格で自分を運んできたという事に驚きと感心を持っていた。

少女も一瞬驚いたが、マキリを運んできた感想を素直に伝える。

一方のマキリはそれを聞き、笑いながら原因を説明する。

二人して笑っていると、突然思い出したかのように少女が頭を振る。

「ってそうじゃなくて！　……はぁ。まあいいわ。それよりどう？　この甘い香り。頭がぼ～っとしてくるでしょう？」

一度深いため息をつき、少女は仕切り直すように話題を変える。

甘い香りを手で仰いでマキリに嗅がせ、その剥き出しになった首筋を優しく撫でくすぐる。

マキリは一瞬身じろぎするが、すぐに鼻を動かしてその匂いを嗅ぐ。

「くんくん……。あ、さっきから何の匂いかと思ったらこの部屋の匂いなんだ～。良い匂いだね！」

「えっ？　あ、頭がぼ～っとしたりはしないの！？」

「うん。僕、いつも皆からぼ～っとしてる、って言われるからさ」

匂いを深く嗅ぎながら、謎が解けた事に嬉しそうな笑顔を見せるマキリ。挙句匂いを褒め、少女は一瞬大きく肩を落とす。

そしてマキリに状態を聞くが、マキリはその匂いが通用しない事を少女に伝える。

そのとき、少女は思った。

（こいつ、手強い……！）

のほほんとした雰囲気を醸し出す少年に、少女はどう打つべきか思考を巡らせていた。

・・・・

――湖畔・円盤外部

円盤の目の前に到着したコハルは、中の様子も知らず真剣な面持ちでそれを見上げる。

「マキリ……待っててね！」

『あぁ、コハル！　念の為ゼロアイは折り畳んでおけ』

コハルは自分に言い聞かせる様に力強く呟く。
するとゼロがコハルに声をかけ、ウルトラゼロアイを半分に折り畳ませる。コハルはそれを握り締め、円盤の中に突入する。

・　・　・　・

しばらく歩いていると、近くの部屋からマキリの声がした。

「っ！　マキリ！」

コハルは思わずそう叫んでしまい、それに気付いた黄色く巨大な目をした宇宙人、『ピット星人』がコハルに襲い掛かる。

「今の声……コハル？」

マキリがそう呟くと同時に、マキリが居る部屋にコハルが転がってくる。

「貴様！」

少女も同じピット星人姿になり、コハルに襲い掛かる。コハルは思わず目を瞑り、ウルトラゼロアイを突き出す。するとそこから緑色の光線が放たれ、ピット星人を打ち抜いた。同様に、最初に襲い掛かってきた方のピット星人も打ち抜く。

『ぐぅ……お、おのれぇ……』

少女だった方のピット星人は無理やり体を動かし、パネルを叩く。

『エレキング！　エレキング！！』

すると円盤が揺れ、湖の底から白い三日月状の角が二本生えた怪獣、『宇宙怪獣エレキング』が出現する。コハルは再度ピット星人を打ち抜き、ピット星人の目から光が消える。

『コハル！　ゼロアイをマキリの目に当てたら、お前も早く逃げろ！』

「オッケーゼロ！」

やけに親しく話すゼロとコハルに、マキリのこめかみが微かに動く。そんなもの気にせずコハルはウルトラゼロアイを展開させ、マキリに近づける。

「「デュワッ！！」」

マキリとコハルが同時に叫び、マキリの体が眩しい光に包まれる。その直後に再び湖が揺れ、エレキングと対峙する様に青と赤の巨人、『ウルトラマンゼロ』が降臨する。
コハルも既に湖畔から距離を取り、その戦いを見つめる。

『ゼロ！　心配かけちゃった分、ここでは思いっきり戦っていいよ！』

『さっすがマキリ！　話が早えぜ！』

マキリはゼロとそう言葉を交わし、ゼロは左腕を水平に伸ばした後、それを腰に添えて右腕を突き出す。

『行くぜ、マキリ！』

『うん、ゼロ！』

マキリにそう声をかけ、ゼロはエレキングに突進する。鋭い拳をエレキングの喉に炸裂させ、エレキングの巨体が揺れる。その隙に猛烈なラッシュを叩き込む。

『オラララララララララララララララララララァ！！』

ゼロが放ったマシンガンの様な拳を受け、エレキングは後方にうつ伏せになって倒れる。

ゼロは頭部にあるゼロスラッガーを二本握り、カラータイマーの横に装着する。

そこに青白い光が集まり、『ゼロツインシュート』の構えに入る。だがそのとき、ゼロの体に白い触手が絡み付く。

根元を目で辿ると、それはエレキングの尻尾だった。エレキングは軽く腕を振り、尻尾に電流を流す。

『キィィィィィィィィィィッ！』

『ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！』

エレキングが放った電流に、ゼロは呻き声を漏らす。胸に溜まっていたエネルギーは四散し、ゼロはその場に肩膝を突いてしまう。

『ゼロ！』

『こんなもんでぇ……この俺を縛れるとでも思ったかぁ！』

マキリの声に、ゼロは力強く返す。そして胸からゼロスラッガーが離れ、尻尾を両断してゼロの両手に握られる。そして再度カラータイマーの横に装着し、四散したエネルギーをもう一度集めて開放する。

『ゼェアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！』

今度こそ『ゼロツインシュート』が炸裂し、エレキングが爆発する。

ゼロはカラータイマーが点滅したのを見て、光を放ってマキリの姿に戻った。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

――湖畔・最深部

そこには、もう一つの円盤が隠されていた。
その中で、玉座に座った巨人に口から冷気を放つ宇宙人が声をかける。

『ピットの奴が殺られた様です……』

『そうか。報告ご苦労、グローザム』

『はっ……』

グローザムと呼ばれた宇宙人は頭を下げ、玉座から離れる。
座ったままの巨人は指をボキボキと怪しく鳴らし、真っ直ぐに正面を見据える。

『カイザーベリアル陛下の意思は……この俺が引き継いでみせる……！』

グローザムの横には、骨と肉が逆になった様な宇宙人や、強固な皮膚を持った、龍に近いが腹部に顔を持った宇宙人、そして黒く不気味な宇宙人が並んでいた……。

To The Next Stage

ＳＴＡＧＥ０３　『秘密の湖』（後書き）

今回はギャグ要素を多めに、コハルにもスポットを当ててみました。
次回はちょっと温度差がありますかね。

それでは次回、【獅子の瞳】
でお会いしましょう！

STAGE04　『獅子の瞳』

――某・孤島

『デェエエアァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！』

ゼロは大地を揺るがすほどの咆哮を上げながら、サイの様な怪獣に『ゼロキック』を炸裂させる。
だがそれを受け止めた怪獣、『突進怪獣ジライノス（命名マキリ）』は、ゼロの右脚を掴んで彼方に放り投げる。

『おわっ！』

吹き飛ぶゼロに、追い討ちをかけるように姿勢を低くし、土を蹴って突進する。その鋭い角で抉る様にゼロの体を勝ち上げ、逆方向に叩きつける。

『ぐあっ！』

背後に聳えた山に激突し、土砂と共に崩れ落ちるゼロ。既にカラータイマーは点滅し、その点滅が早まる。
ゼロは何とか立ち上がり、ジライノスに向かって構えを取る。
だが、問題は彼ではなく彼の相棒に起きた。

『はぁ……はぁ……』

『おいマキリ、まだ行けるか？』

『全然……平気だ……よ……』

ゼロと同化しているマキリは既に限界が近く、ゼロの動きも不安定になっていた。

ゼロと視覚、聴覚を共有しているマキリは、長時間それを受け止められるほど慣れてはいなかった。当然彼と同化して戦闘する度に疲労は溜まり、彼の肉体はボロボロだった。

ゼロに気を遣わせまいとするマキリに、ゼロは黙って拳を握り締める。

『一気に決めるぞ、マキリ！』

『うん……』

ゼロは左腕を水平に伸ばし、そのまま右腕を縦にして腕をＬ字に組む。

金色の光線、『ワイドゼロショット』が放たれ、ジライノスに直撃する。最大出力の光線を受け、爆発と共にジライノスの姿が硝煙の中に消える。

『っ！　やったか……？』

ゼロが構えを解いてそう呟くと同時に、硝煙が晴れる。

『ギシャァァァァァァァァァァァァァァァオォォォ……』

その中からは、傷一つ無い肉体を見せるジライノスが立っていた。

『嘘だろ……っ！』

その事実にゼロは驚愕し、その場に膝を突いてしまう。そして思い出したかのように、自分と同化している少年に声をかける。

『マキリ！　おいマキリ、無事か！？』

『……』

何度も少年に呼びかけるが、少年からの返事は無い。一度悪態をつき、ゼロは重い体を無理やり立たせる。

そして右手に最後のエネルギーを集め、大地を殴り付ける。

『デアッ！』

そして土煙を巻き上げ、ゼロはその場から逃亡した。
標的を逃したジライノスは、無言で地中に潜っていった。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

「がっ……」

マキリは何とか岩場を進むが、ついに力尽きて倒れてしまう。
マキリを探して森の中を走っていたコハルがそれを見つけ、マキリに駆け寄る。

「マキリ……っ！」

だがコハルが近付くよりも早く、初老の僧侶がゆっくりとマキリを抱えた。
警戒する様に僧侶を見るコハル。僧侶はそれに気付き、コハルの目を見つめる。

「……付いて来い」

見た目とは裏腹に、どこか暖かく優しい声でそう言う僧侶。コハルはただ頷き、僧侶の後を着いていった。
その左手に、赤い宝石の付いた指輪があったのをコハルは見逃さなかった。そうまるで、獅子の瞳の様な……。

○ウルトラマンゼロ～大きな勇者と小さな勇者～
ＳＴＡＧＥ０４　『獅子の瞳』

◇　◇　◇　◇　◇

――小屋

マキリが目を覚ますと、そこは小さな木でできた様な小屋だった。

「ここは……？」

「マキリ！」

「気が付いたか」

まず最初に飛び込んできたのは、嬉しそうな笑顔のコハルの姿。
続けて聞こえてきた声の主を探すと、自分から少し離れた所に青い服を着た僧侶を発見した。

「貴方が、僕をここへ……？」

僧侶はそれに答えず、木の机に乗せたウルトラゼロアイを見せる。

「これは……お前の物か？」

「あっ、その……はい」

「そうか……」

突然聞かれたマキリは、少し目を泳がせた後、小さく頷いた。
すると僧侶は興味深げにマキリを見た後、そのままウルトラゼロアイを懐にしまった。
それに驚き、マキリは痛みも忘れて飛び起きる。

「ちょっと、返して下さいよ！　何で盗るんですか！」
「分からないのか？　今のお前は、ゼロと戦うには相応しくない」

僧侶が言った言葉に、マキリの動きが止まる。
一度も自分は『ゼロ』と口にしていないのに、この僧侶は口にした。それ以上に、自分がゼロと同化している事を知っている。
それを理解したマキリは、僧侶から大きく距離を取る。

「貴方は……？」

「あっ、違うんだよマキリ！」

目付きを変えたマキリに、コハルが慌てて割って入る。
それに肩の力を抜き、怪訝そうな顔をするマキリ。

「違うって……なにが？」

「あのね、この人は……」

そう言ってコハルが微かに背後の僧侶を見る。
すると僧侶の指輪が輝き、一瞬僧侶の姿が赤い獅子を模した戦士の姿が重なる。そしてすぐに僧侶に戻るが、それだけでマキリはその場に尻餅を付いてしまった。

「ウルトラマンレオさんなんだよ！」

「……えええええええええええええええええええええ！？」

コハルの言葉を聞き、『ウルトラマンレオ』こと『おおとりゲン』を見つめるマキリ。

そして数秒経ち、木々を揺らすほどの絶叫が孤島に響き渡った。

・・・・

マキリが落ち着くまで数分。

ようやく事を理解したマキリは、その場に正座してゲンを見つめる。

「それで、そのウルトラマンレオさんが何の御用で……？」

マキリの言葉に、ゲンは鋭い目付きでマキリを睨んだ。

背筋が泡立ち、恐怖を覚えるマキリ。

「お前は……あの怪獣に負けた。そうだな……？」

「あっ……はい……」

ゲンの遠慮も無い言葉を聞き、マキリは悔しそうに奥歯を噛み締める。
途端に、ろくに動かない自身の体への怒りと悔しさが込み上げてくる。

「僕は……ゼロの動きについていけませんでした……」

マキリは俯き、大粒の涙を零す。
涙で塗れた床を見た後、ゲンが重々しく口を開く。

「……その顔は何だ……。その目はっ！　その涙は何だ！　その涙で、地球が救えるのか……？」

突然聞こえてきたゲンの吼える様な言葉に、肩を大きく跳ねさせて顔を上げるマキリ。
ゲンの問いに、マキリは口を閉ざしてしまう。
ゲンの言う通り、泣くだけで地球が救える訳ではない。分かっていたのに涙を零していた自分が情けなく感じた。
そんなマキリの心を悟ってか、僧侶は立ち上がってこう言った。

「付いて来い」

◇　◇　◇　◇　◇　◇

――山の中

コハルを小屋に残し、マキリはゲンの後に続いて山の中に来ていた。
そして何か木でできた的が立てられた場所まで来たとき、ゲンがマキリに柔道着を投げ渡した。
マキリはそれに着替え、帯をしっかりと結ぶ。

「その的を蹴り一本で折って見せろ。話はそれからだ」

ゲンにそう言われ、マキリは木の的に向き直る。
そして右脚を振り上げ、全力で的を蹴る。

「はっ！」

が、木は微動だにせずマキリの蹴りを受け止める。
それを見たゲンは再び吼える。

「勢いが足りん！　もっと気合を込めろ！」

「くっ……はい……」

一度右脚を下げ、再び全力で、今度は気合も乗せて的を蹴る。

「やっ！」

それでも木の的は微動だにせず、マキリを嘲笑うかのようにその場に佇んでいる。

再びゲンの怒号が飛び、マキリは何度も木の的と格闘した。

・・・・

「でぇやっ！」

マキリはそう叫びながら木の的を蹴り付ける。すると的が打撃痕を中心にして、真っ二つにへし折れる。

それを見たマキリは、嬉しそうに飛び跳ねる。

「やった！　やりましたよレオさん！」

そう言って笑顔で自分の方を見るマキリに、ゲンは表情一つ変え

ずにこう言った。

「うむ。なら、次の特訓だ」

「へっ！？」

ゲンが冷たく言い放った死刑宣告に近い言葉に、マキリは思わず素っ頓狂な声を漏らす。

そして山を降りるゲンを見失わない様、マキリは足を速めた。

オニグラの授業とどっちがハードかな、などと余計な事を考えながら。

◇　◇　◇　◇　◇

――浜辺

青く綺麗に澄み渡った海を眺めながら、マキリは思わず呟く。

「一日で山と海に来るって……なんだか不思議な気分ですね」

そう言って横を見るが、既にゲンの姿は無かった。

マキリが周囲を見回していると、遠くから走ってくる一台の車が見えた。

さらに目を凝らす。タイヤが大きい。ボンネットも大きい。というか全体的に大きい。
車に詳しくないマキリでも分かる。ジープだ。
ゲンの乗ったジープはマキリの前で止まる。ゲンはそこから降り、マキリの正面に立つ。

「今からこいつでお前を追い掛ける。お前はそれを正面から受け止めろ」

「あ、なるほど～……ってはいっ！？」

ゲンの説明を聞き、笑いがなら振り向くマキリ。だが少しして状況を理解し、慌ててゲンの方を向く。
既にゲンはジープを運転し、大きく距離を取っていた。

「柔道着に入っている薬を飲んでおけ！」

「薬……？」

彼方からゲンの声が聞こえ、マキリは柔道着の内側を探る。すると青い液体の入った小さなカプセルを発見する。一瞬躊躇しながらも、意を決して一気に飲み干す。
途端に強烈な眩暈がする。

「うぁ……」

風の流れが見える。
プレートが動く音が聞こえる。
地球の匂いがする。
空気の味がする。
大地を伝わる波動を感じる。
普段は感じられないものを五感に感じる。その感覚は、ウルトラゼロアイを装着してゼロとして戦っているときと似ていた。視覚と聴覚しか戦闘中は共有していないが、ゼロの感じている嗅覚、味覚、触覚はこうなのかと妙に納得した。
刹那、眼前にジープが突進してきた。

「うわぁっ！？」

咄嗟に両腕を前にしてジープを防ぐマキリ。だがマキリはそのまま後方に吹き飛ばされ、物凄い砂煙が舞い上がる。
砂煙の奥から、両腕を前に突き出したままのマキリが出てくる。

「……あれ？　何で僕無事なの……？」

両腕が骨折することなく無事である事に、マキリは驚きに目を見開く。
ゲンは何も言わずジープを下げ、再び同じ距離を取る。
マキリは我に帰り、先程の訓練を思い出す。

「もしかして……キックで対抗しろって事なのかな……？」

そう呟き、左腕を水平に伸ばしてゆっくりと右腕を前に伸ばす。左足をしっかりと踏みしめ、右足を大きく引く。腰を深く落とし、突進してくるジープを睨む。

右足に力を込め、ジープに向かって振りぬく。

「であっ！」

ジープと衝突し、その衝撃に歯を食いしばるマキリ。

「ぐぅ……」

右足にさらに力を込めるが、支えていた左足が限界を向かえ、大きく砂浜を転がる。

だがジープに残った痕を見て、ゲンは微かに眉を吊り上げる。

「だあっ！　くっそ！」

「一発でダメなら二発！　二発でダメなら三発！　相手を打ち砕くまで打ち込んで来い！」

「はい！　師匠！」

悔しそうに天を仰ぐマキリに、ゲンの吼える様な声が飛ぶ。いつの間にか自分を師匠と呼ぶマキリに嬉しく思いつつ、ゲンは再びジープに乗る。
すると突然大地が揺れ、山の方からジライノスが出現する。
マキリは勢い良く立ち上がり、ジライノスを睨む。

「あいつはっ！」

「マキリ！」

マキリが立ち上がると同時に、不意にゲンがマキリの名を呼ぶ。
そして投げられた物を受け取り、手首を反して見つめる。

「ゼロ！」

その右手には、しっかりとウルトラゼロアイが握られていた。

「ゼロ、大丈夫？」

『そりゃこっちのセリフだ。もう平気なのか？』

「たった今ウォーミングアップが終わった所！」

『へっ！　そんなら良いけどよ』

マキリは短くゼロと言葉を交わし、目を瞑って大きく深呼吸する。そして両手で頬を叩き、何か熱いものを灯した瞳でジライノスを睨む。

「それじゃ……行くよ、ゼロ！」

『ああ、マキリ！』

マキリはゼロに声をかけ、ゼロはそれに力強く応える。そしてウルトラゼロアイを眼前に突き出し、吼えると同時に両目に装着する。

「デュワッ！」

マキリの体が眩しい光に包まれ、次の瞬間には『ウルトラマンゼロ』としてジライノスの前に構えていた。

『デアッ！』

ゼロを見つけるや否や、ジライノスは右足で大地を擦り突進に備える。

ゼロも右足を引いて構えるが、そこへマキリの声が響く。

『ゼロ！　ちょっと、僕にやらせてもらっても良いかな？』

『あん？』

『考えがあるんだ……』

そしてジライノスがその鋭い角をゼロに向け、勢い良く突進してくる。

ゼロも発火させた右足を勢い良く振り抜き、ジライノスの角とぶつかり合う。

互いにもう一段力を込め、大地を踏みしめて押し合う。

『くっ……』

『一発でダメならぁ……！』

ゼロが苦痛に声を漏らすが、ゼロの中でマキリは別の行動をとる。そして左足が発火し、飛び上がると同時に体を捻ってジライノスの角に叩き込む。

『二発でどうだぁぁぁぁぁ！！』

発火した左足が、ジライノスの角をへし折る。『二段ウルトラゼロキック』が炸裂し、ジライノスは苦痛に悶えながら引き下がる。

『すげえじゃねえかマキリ！　考えたじゃねえか！』

『うん。少なくてもゼロよりはね……』

『おい！』

ゼロはマキリを褒め称えるが、マキリはさらりと冗談めいた事を呟く。ゼロはマキリに憤慨しながらも、今だにこちらを睨み続けるジライノスの方を向く。

『っとぉ、お前にはまだ言ってなかったなぁ。冥土の土産に教えてやらあ！』

ゼロはカッコつけた様に右腕を突き出し、両足を発火させる。
そしてジライノスを真似て、右脚で地面を擦る。

『俺のビッグバンはぁ……もう、止められないぜぇぇぇぇぇぇ！！』

勢いをつけてジライノスに突進し、発火した両足を連続で叩き込む。

『ダァラララララララララララララララララァァァ！！』

ジライノスの胴体に、『マシンガンウルトラゼロキック』が炸裂する。

最後の一撃がジライノスの胴体を貫き、左脚でジライノスの体を蹴って距離を取る。

着地すると同時にジライノスが倒れ、爆発を起こす。

ゼロはゆっくり立ち上がり、ゲンの方を向いてVサインをした。

◇　◇　◇　◇　◇

マキリとコハルはゲンの前に立ち、頭を下げていた。

「色々と、お世話になりました！」

元気良く礼を言うマキリに、ゲンはくるりと背を向ける。

「力を得たのはお前の実力だ。俺は何もしていない……」

そう言い残し、森の奥へ歩いていく。

その背中を見ながら、マキリは一歩前に出て声をかける。

「レオ兄さん！」

その声を聞き、ゲンはマキリの方に振り向く。

「またいつか……鍛えてもらいに来ますね！」

「っ！　……あぁ」

笑顔でそう言ってくるマキリに、ゲンは一瞬驚いた後嬉しそうに微笑んだ。

森の奥へと戻っていくゲンの背中を見つめるマキリ。そのマキリを見ながら、コハルは不思議そうに呟く。

「何かマキリ……少し大人になった？」

「うん？　……くすっ。ま、ゼロよりかはね」

『だからおい！』

コハルの言葉に、マキリは微笑みながら答える。左腕のウルトラゼロブレスレットからゼロの憤慨する声が聞こえるが、マキリはそれを流す。

そして再びゼロに変身し、家に向かって飛び立った。

To The Next Stage

ＳＴＡＧＥ０４　『獅子の瞳』（後書き）

変身こそしませんでしたが、レオ兄さんの登場回でした。
感想など、あれば頂けると嬉しいです。

次回からは新章に突入し、クラスメート達にもスポットが当たっていきます。
それでは次回、【友達の意味】
でお会いしましょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2481z/

ウルトラマンゼロ～大きな勇者と小さな勇者～

2011年12月16日19時49分発行